

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 荻野 厚志

論文題目 ジョルジュ・バタイユと先史時代芸術
—遙か遠いコミュニケーションについて—

論文審査委員 鵜飼 哲教授 喜多崎 親教授 森本 淳生准教授

1 本論文の構成

本論文は二〇世紀フランスの思想家ジョルジュ・バタイユがラスコーの洞窟絵画をめぐって展開した考察を「交感」(communication) という体験の検討を軸に論じたものであり、人類学、考古学、芸術学、美術史、文学など複数の学問分野にまたがる横断的な研究である。

本論文は次のように構成される。

はしがき

序章あるいは「正誤表」

第一章 バタイユの著作、研究に関する概略

『ラスコー』と、その周辺のテキスト

『ラスコー』以前の先史時代芸術研究の概略

第二章 交感に至る全体へのヴィジョン (導入的考察)

1 全体としての壁画空間

「全体」としての壁画空間

大広間と奥洞の空間構成

2 二十世紀絵画と重ね描きの表現

透明の表現

侵食と錯綜

現代芸術と変質

第三章 先史時代の形象生成に関する諸考察

1 「変質」概念をめぐって

「原始芸術」への批判

人間の変質

「変質」概念について

2 動物の表象と人間の表象

「竪坑の場面」の発見

「竪坑の場面」の困難な解釈 (奇異なる人間像への着目)

労働と結び付いた人間と芸術

羞恥、あるいはイメージの共有による同類意識

「人間」の形象（混淆的人間像）

3 仮面をつけた人間

羞恥心と仮面

仮面の復讐（近代的仮面への批判）

カオスとしての仮面

仮面のコミュニケーション

4 先史時代のエロティックなイメージについて

『ラスコー』における女性像

「理想主義」に関する遡及的概略

典型としてのヴィーナス像

ヴィーナス像における「産出機能」

欲望を喚起するイメージ

レスピュグのヴィーナス（最も直接的な意味作用と欲望の対象化）

グラハム夫人の肖像、あるいは娼婦

エロティックなイメージにおける顔の表現と非人格性

ヴィーナス像の現代的意味

5 動物のイメージ

人間と動物の友愛

獣的猛威の逆説

動物のイメージとモラル

第四章 呪術と芸術における「交感」について

1 先史時代芸術と呪術との関係についての諸見解

2 有用性と感覚的現実（壁画の呪術的解釈への批判）

3 壁画と儀礼空間（洞窟の照明についての考察）

4 集団性をめぐる中間報告

5 呪術の誕生と偶然性の形象化

6 偶然から類似へ（イメージの呪術的利用）

7 意図のなかの「操作」（事後的な全体の効果）

8 創造としてのオペレーション、あるいは「天才」の瞬間

9 停滞からの脱却と世界の創造

10 轍なき歩みとラスコーの奇蹟

第五章 「私たち」の誕生と芸術による交感（結論に代えて）

Bibliographie

2 本論文の概要

はしがきでは、著者が昨年訪れたラスコーの印象が記される。

序章では、本論文の構成に加えて、communication という言葉のバタイユの思想における含意についての予備的考察、諸々の翻訳の可能性の比較検討が行われる。

第一章では、これまでのバタイユ研究における『ラスコー』(1955)の位置づけ、諸論者が採用した観点が簡潔に記述されたのち、モーリス・ブランショの「芸術の誕生」の一節が引かれ、「交感」が考察されると同時に実践されてもいるこのテキストの特異な性格が強調される。また、『ラスコー』に先行する先史時代芸術論の動向が概観される。

第二章では、まず、ラスコーの洞窟絵画の壁画空間がバタイユにとって全体として持つ意味が、洞窟の内部構造に即して検討される。続いて「大広間」「奥洞」と呼ばれる空間の特異な性格が「無秩序な均衡」と規定され、諸世代の描き手たちの作業が結果として生み出した「引き裂かれた全体」の記述へと移る。そこでは先行する図像に重なる素描の「侵食」性、動物身体内部が描かれる「透明」性、侵食や重ね描きの果てに現れる「錯綜」性などが、アルプ、ピカビア、マッソン、ラウシェンバーグ、ポロックなど二〇世紀美術の重要ないくつかの動向との比較のもとに検討され、これらの操作を概括する概念として対象の暴力的「変質」が焦点化される。

第三章では、この「変質」の問題が、バタイユの主要な論点のひとつでありラスコーの「堅坑の場面」に描かれている、自然主義的動物像と歪曲された人間像の対比をめぐって展開される。この人間像の変質は、自然を否定し労働によって人間となりながらも、みずから否定した動物たちの世界への郷愁を捨て去ることのできない存在の表現である。このように規定された人間存在にとって動物は至高性を体現し、その自然性との交感は、バタイユによれば、動物を前にした人間であることの「羞恥」によって特徴づけられる。ラスコー壁画における人間像の変質＝歪曲はとりわけ顔に対してなされており、この顔面像をバタイユは「仮面」として解釈する。著者はバタイユの1930年代の仮面論を参照しつつこの解釈の含意を検討し、またミシェル・レリスやマルセル・グリオールによるアフリカの仮面をめぐる考察からバタイユが引き出したものを問い、仮面が表すものを自己の変容であり脱自的な外部の経験であるとする。この変容を30年代のバタイユは「カオスの受肉」と表現していたが、この表現は『ラスコー』が目指す「変質」を被った人間像にも当てはまると著者は主張し、ここにバタイユ的「交感」の特質である非人格的共感が集中的に現れていると考える。

この人間像を男性と想定されるラスコーの素描画家の自己呈示であり「自画像」とみなすならば、同様の非人格化は欲望の対象の表現である先史時代の女性像にも別の形で見出すことができる。この点を検討するため著者は、いわゆる「脂肪臀症」のヴィーナス、とりわけ「レスピューグのヴィーナス」に関するバタイユの論考を参照する。これらの像の形態的特徴をバタイユは「奇形的理想主義」と命名するが、この奇形性は欲望とその表象の間の齟齬から生ずる。「エロティックな世界の根底」は迂回なしには表現できず、その迂回の距離がまた欲望の強度を高める循環を引き起こす。バタイユにとって「美」とは侵犯されるための理想であり、芸術による交感理想の美とマチエールの混沌の間の往復運動から生ずる。バタイユの芸術論は瞬間やカオス的運動を強調するが、造形芸術においてはカオスの虚構的な固定を認める。固定されることでイメージは初めて交感され、そのことによって運動を開始すると彼は考えるのである。

「レスピューグのヴィーナス」についてのバタイユのこのような所論は、洞窟壁画の中心をな

す動物の表現にも当てはまる。人間は労働によって動物の世界を離脱する。しかし、それでもなお、動物の狂奔を欲望する。動物のイマージュはこの二つの運動をいずれも宙づりにしたまま実現している。そこには、一方では「非—動物」としての人間から動物への友愛、共感、郷愁が、他方では動物の世界から離脱したことに対する悔悟、羞恥、罪責感が、激しい両義的感情となって発露している。著者によればそれはバタイユの供犠論にも通じる論理であり、人間という閉域の突破が「交感」可能な表現へと至るための不可欠な条件なのである。

第四章では、以上の分析を踏まえて、第一章でバタイユの論の要とされた、ラスコーの洞窟絵画の「全体性」があらためて考察の対象となる。『ラスコー』執筆当時すでに定説となっていた先史時代の洞窟壁画を呪術的芸術とする解釈に対し、バタイユはある両義的な態度を取る。一方ではこれらの絵画の宗教性、集団性、受容的性格を保証するものとして、呪術的芸術論は積極的に評価される。他方では呪術が物質的有用性へと方向づけられる限りで、この解釈はバタイユの反功利主義的芸術観と抵触する。このアポリアに直面し、呪術的意図からこぼれ落ちる要素を探し求めて、その結果バタイユは、ラスコーの洞窟壁画の「全体性」に着目するに至ったのである。そして、この「全体の効果」を産出するものとして著者が注目するのが、バタイユが「作業 *opération*」と呼ぶ挙措である。この挙措は意図によって導かれつつも、偶然への応答、驚異への意志、聖なるものへの接近などの諸要素を含む。これらの要素のゆえに残存することとなった痕跡こそが、ラスコーの洞窟壁画、とりわけ動物の素描群において真に贈与の名に値するものであり、「交感」されるのはイメージにおけるこの「生き残り」にほかならないと著者は考える。このような「作業」の能力をバタイユは「天才 *génie*」と名付け、洞窟絵画の発見によってその「天才」が現代に出現しえたことをこそ彼は「ラスコーの奇蹟」と呼ぶのである。

第5章では、洞窟壁画を通じて「交感」可能であるような「私たち」というバタイユの想定が検討される。バタイユは「人間」と「芸術」は同時に発生したと考えており、その立場からラスコー人と二〇世紀人を包含する「人類」という観念を構成する。この「人類」は「芸術」というつねに反復される創造に立ち会うことによってのみその一体性が担保されうる。したがって、有用性に従属した日常的意識のなかでは、この「私たち」は自らを知ることがない。「交感」が生じ「私たち」がそれとして知られるのは動物的狂奔の分有という驚異に立ち会うときのみであり、そのときにはその「交感」は、遙かな時間を超えて実現されるのである。

3 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、まず第一に、後期バタイユの難解で特異なテキストを、同時代の人類学、考古学を含む多様な文献の渉猟を通して丁寧に読み解き、整合的かつ説得的な解釈を呈示した点である。これは多岐にわたるバタイユの著作に著者が精通しており、バタイユのテキストの細部に暗示されている思考の振幅を的確に把握する能力を備えていることを示している。

第二に、ラスコー洞窟壁画がバタイユに与えた感銘を受容美学の角度から考察し、遙かな時間を超えた芸術的「交感」の可能性の条件を総合的に明示した点である。このことはバタイユ研究のみならず、美学一般の発展にとって貴重な貢献とみなすことができる。

第三に、バタイユの相即的な動物観、人間観を、羞恥や悔悟などの情動の微細な働きにまで立ち入って検討し、その特質を立体的に把握することに成功したことである。この点は、現代の尖鋭な哲学的動物論とバタイユの思想の関連を正しく標定する作業に、確かな出発点を提供するものであると考えられる。

とはいえ、本論文にもいくつかの問題点は存在する。

第一に、叙述が学術論文の標準的な規範をしばしば逸脱し、著者の主観的側面が過度に強調される傾向があることである。こうした点から論文の学術性について審査員の一人から強い疑問が提出された。このスタイルが著者の作家的力量を感じさせる場合もあるとはいえ、今後の研究の発展のためにはより客観的な叙述方法を採用することが望まれる。

また、その点と関連して第二に、著者の作業がバタイユの思想と一対一で向き合いその深みに単身降りて行くというような形を取るために、先行研究については観点の整理が最初に簡単になされたのみで、みずからの検討の結果とそれらを突き合わせ、本論文の独自性を明示する手続きが十分に取られていないことである。このような論証の不十分性はラスコー洞窟壁画と二十世紀美術のいくつかの動向を比較検討した箇所についても指摘されなければならない。

そして第三に、フランス語原文の理解にいくつかの看過しえない誤りが見られたことである。主題的な研究対象となる作者のテキストを特権的に重視する著者のような立場に立つ場合、テキストの語学的理解の水準はそれだけいっそう厳密に確保されなければならない。この点で今後厳しい自己点検が求められよう。

しかし、これらの問題点は、本論文が全体として達成した成果にくらべれば瑕瑾に類するものであり、その価値を大きく損なうものではない。本論文が、著者の今後の活躍をおおいに期待させてくれるすぐれたものであることにはかわりはない。

以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終試験結果要旨

2008年6月11日

受験者	荻野厚志
最終試験委員	鶴飼哲 喜多崎親 森本淳生

2008年6月2日、学位請求論文提出者 荻野厚志氏の論文および関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文「ジョルジュ・バタイユと先史時代芸術—遙か遠いコミュニケーション

ンについて」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、荻野厚志氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、荻野厚志氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。